

特別寄稿

母性看護学実習の取り組み

日本保健医療大学
今井充子

看護学実習は転換の時を迎えている。コロナ禍は人々の生活に新たな風をもたらした。それは、私たち看護学を教えそして学ぶ者にも。

本学母性看護学領域における学修は、2年次から始まる。2年次前期、後期に講義を受け知識を蓄え、3年次前期に演習を通して看護技術および看護過程の展開を学修する。そして3年次後期に臨地実習にて実際の看護を学ぶ。看護を実践の学問と捉え、3年次の実践に向かって講義・演習と積み上げていく。母性看護学実習は、2単位90時間である。それは地域における女性の健康と子育て支援、そして病院内における周産期看護の2つに大きく分かれている。

コロナ禍により、臨地での受け入れが困難になり、実習を臨地ではなく学内で実施せざるを得ない状況となった。そこから、見えてきた学内で学べる内容、臨地でしか学べない内容を整理したい。

1. 地域における女性の健康と子育て支援

地域における女性の健康は、コロナ禍以前は男女共同参画支援センターにてグループワークを取り入れながら実施していたが、コロナ禍ではオンラインにて、ほぼ講義形式で実施した。

子育て支援については、コロナ禍前は子育て支援センターで臨地実習を行い、利用者である子育て中の母親と交流を行い、子育てについての悩み、日常生活パターン、子育て支援施策等を学修していた。コロナ禍では、子育て支援施策についてはオンライン講義で学んだが、子育て支援センターでの臨地実習は行えなかった。

以上により、地域における女性の健康および子

育て支援における施策は、コロナ禍でも学修できた。しかし、子育て支援センターを利用している母子との交流ができなかったため、母親の子育てにおける悩みや日常生活パターン、母親の忙しさ等については理解が難しかった。

2. 周産期看護

周産期看護では、コロナ禍以前には、産科施設で5日間の実習を行っていた。一組の母子を2人一組の学生が受け持ち、看護過程を展開し個々の看護を行っていた。また、受け持ち看護を展開しながら、機会があれば分娩見学を行い、受け持ち母子が退院した後は、妊婦健診の見学、外来における検査の実施等を行っていた。

産後の母子の変化は激しく、毎日、翌日の母子の状態を予測して看護計画を立案しなければならず、学修が追いつかないことが多々あった。また、自律授乳が主流であるので授乳時間や母子の日課に翻弄され、立案した看護計画をこなすことに苦心する姿が見受けられた。さらに、受け持ち母子の退院後は新たな学修が必要となり、疲弊していた。

コロナ禍での周産期看護は、教員が事例を提示して一組の母子を1人の学生が受け持ち看護過程を展開し、褥婦役・新生児役の学生と看護師役の学生で臨地実習さながらのロールプレイを行った。分娩見学、妊婦健診、外来での検査については、自宅学修の内容を教員が確認した。

ロールプレイでは看護師役に必要な知識だけでなく、褥婦役、新生児役を演じるために対象を理解しなければならず多くの知識が必要とされた。また、自律授乳や母子の日課の時間を調節できる

ため、知識を確認しながらゆっくりと看護を展開することができた。

以上により、学内実習では、知識の定着および統合、看護過程の展開、モデルを使用しての看護技術を学修することができた。しかし、褥婦に特有な子宮底および乳房緊満の触知、新生児に特有な皮膚の黄染の変化、体重減少等の学修は難しかった。また、看護師の思い通りにならない啼泣や体動のある新生児でのバイタルサインの測定など、正確な看護技術と正確な情報を得るための工夫等を考える機会がロールプレイではできなかった。さらに、母子相互作用、母親役割獲得過程としての褥婦の心理的变化や育児技術の向上、褥婦の日常の忙しさなども想像するしかなく学修が困難であった。臨地での実習ではないので、自律授乳や褥婦や新生児の状態によるタイムスケジュールの組み方および変更なども学修できなかった。

臨床助産師からは「実習をしていない新人は他人に触ることができない」とのお言葉をいただいた。ロールプレイで実施できる技術は限られており、母性看護に限らず他人に触れる機会が少ないまま卒業する学生は卒後教育に期待するしかないと考えさせられた。

3. コロナ終結後の母性看護学実習

私たちは、必要に迫られながらもさまざまな実習方法を検討し、試してきた。私は、今、コロナ禍以前の実習に戻すことに疑問を感じている。というのは、学内でのロールプレイでは、学生がゆっくりと学修をすすめられ、以前の病棟実習のように疲弊することはなかったからである。今後は、以前の実習の良いところとコロナ禍で体験した実習の良いところを取り混ぜながら実習を行うのが良いのではないかと考える。

褥婦と新生児の変化は激しく、他の領域での実習では補えないものがある。そのため、母性看護学実習で毎日褥婦と新生児に触れ、視覚的に確認することは机上で学んだ知識をより定着させるためにとても有効である。また、褥婦の生の声、新生児の体動にじかに触れることは対象理解にとて

も役立つ。さらに病院での忙しさを体験し、その場の空気に触れることは今後看護師として活躍するであろう学生には貴重な体験となる。

以上により、午前中はコロナ禍以前にも行われていた実習を行い、午後は午前中に見聞きした内容を振り返りつつ知識を統合し、翌日の実習の計画を立てる等、学生が思考をまとめる時間を設けながら臨地実習が展開できると良いのではないかと考える。